

アイルランド演劇を掘り起こす(1)

——マクナルティの『市長』とコウルターの『鼓手隊登場』——

河野賢司

本稿は、アイルランド演劇史においてその名は言及されるものの、きちんと読まれたり考察の対象に取り上げられることの稀有な演劇作品を発掘して内容を紹介し、アイルランド文学史の支流に密やかに咲く、瑞々しい佳作の存在を伝えることを企図するものである。

①エドワード・マクナルティの『市長』

(I) 劇作家略伝

エドワード・マクナルティ ([Matthew] Edward McNulty, 1856-1943) は、1856年、北アイルランドのアントリム州 (Antrim) 生まれ。同年のバーナード・ショー (George Bernard Shaw, 1856-1950) のダブリン通学学校での同級生で、ショーの姉ルーシー (Lucy Shaw, 1853-1920) とも懇意な友人であった。ショーとは音楽や著作の興味を共有し、ジョン・オドノヴァン (John O'Donovan, 1921-94) による評伝劇『シング・ストリートのショー一家』 (*The Shaws of Synge Street*, 1960; at Abbey) では、ナイーブで思いやりのある登場人物の一人として描かれている。マクナルティは銀行支配人を務めるかたわら、『オライアン氏』 (*Misther O'Ryan*, 1894), 『百姓の倅』 (*Son of a Peasant*, 1897), 『マリガン夫人の数百万』 (*Mrs Mulligan's Millions*, 1903) などの農村生活を題材にした小説も書いている。1943年5月12日に逝去した時に残された遺稿には、かならずしも正確ではないが、ショーとの交遊関係があたたかな筆致で綴られているという。

(II) 戯曲の梗概

アビー劇場で上演されたマクナルティの芝居は2編ある。『メアリー・ドイルへの求愛』 (*The Courting of Mary Doyle*, 1921) は、多額の銀行預金があると思われた女中が男たちに言い寄られる喜劇である。本稿で扱う『市長』 (*The Lord Mayor*, 1914) はこれに先立つ処女戯曲であるが、還暦を控えた作家の手になるだけあって、巧みな構成である。

妻の言いなりになって政界入りさせられたジミー・オブライエンという男が、ダブ

リン市の発注する随意契約で儲けを狙う利己的な派閥に操られて市長に祭り上げられ、英国国王の訪問を公式歓迎する条件で、ダブリン城（英国当局）から准男爵の称号（baronetcy）まで裏取引で提供される。その彼が、最後に操り人形から指導者に豹変する展開は、いささか説得力に欠けるきらいはあるが、当時のアイルランド政界や社会生活の裏側を暴き、大いに哄笑を誘う芝居である。時代設定は、初演の1914年における「現在」（Present day）。

第1幕。早朝8時半、45歳で赤毛の事務弁護士ギャフニー¹⁾(Gaffney)の法律事務所で、雑役婦マーフィ夫人(Mrs. Murphy)が袖をたくしあげ鼻歌を歌って掃除中。同僚のモロウニー夫人(Mrs. Molony)も合流し、しきりに咳き込み、体調が悪いとこぼす。世間話を始めた二人は、今日この事務所で、破産したジミー・オブライエン(Jimmy O'Brien)に対する債権者集会があること、オブライエンの本業は金物屋(ironmonger)であるが、妻の虚栄心を満たすために市議会入りを果たしたものの、妻の浪費癖が災いして破産した、などと噂する。ギャフニーが到着。まだ清掃が終わっていないとマーフィ夫人を口汚なく罵り、モロウニー夫人は哀願する。ギャフニーに雇用されている25歳の事務員ケリー(Kelly)が遅刻²⁾して出勤し、ギャフニーの指示で二人を丁重に引き取らせる。

続いて、債務者のオブライエン一家3人が登場。ジミー・オブライエンは白髪に顎鬚の弱々しい小男、20歳も年下で黒服姿の夫人は、教育も受け立派な家系の出なのに、両親の猛反対を押し切り、別の男の求愛も断って、こんな甲斐性のない商人風情と結婚したのが自業自得、と涙まじりに愚痴をこぼす。一方、一人娘モイラ(Moira)は、母方の従兄弟を頼ってカナダのウィニペグに一家で移住し、速記やタイピングの特技を生かして自立する意思を語り、父親へのいたわりや情愛を示す。ギャフニーはオブライエンに、妻の虚栄心のもとで議員になった挙句に、多額の選挙費用を捻出できずに破産に陥った、身分不相応の愚かさを批判する。その揶揄にモイラは毅然と反論。その顔付きを見たギャフニーは、彼女の魅力に一目惚れする。事前打ち合わせのために一家は控室に案内される。

やがて8人の債権者のうち2人の市議会議員——スキャンラン氏(Mr. Scanlan)とドハティ氏(Mr. Doherty)——が到着。スキャンラン氏は、無給の奉仕活動の代償に、就職先斡旋などの役得や便益を議員が得るのは当然だと豪語し、ドハティ氏もそれに同意。徹底的な債券回収で最低でも1ポンド(=20シリング)につき15シリング、すなわち75%の回収を目指すと主張するスキャンラン氏に、1ポンドにつき12シリング6ペンス、つまり62.5%が関の山と推測するドハティ氏。遅れてモーラン夫人(Mrs. Moran)と5人の債権者が到着。分限を弁えないオブライエン夫人にかねてより反感を抱くモーラン夫人は、スキャンラン氏同様に、1ポンドにつき15シリングの取り立てを主張。

やがて、管財人役のギャフニーがオブライエン一家を連れて登場。開口一番、オブライエンの財政状況は予想外にひどく、1ポンドにつき2シリング、すなわち10%の回収が限界である旨を債権者たちに告げる。非難轟々の彼らにギャフニーは、オブライエンを破産から救済するのみならず、貸付金

全額を複利付きで取り戻せる、驚くべき方策があると切り出す。それは、オブライエン議員をダブリン市長選³⁾に担ぎ出す提案であり、現在、市長選の最有力候補ラニガン (Tom Lanigan) は、4月に予定の英国国王のダブリン訪問に関して曖昧な態度、どちらかといえば訪問容認の態度を示しており、この候補者への対抗馬にあてるのだという。オブライエンがこれまで議場でただの一度も発言したことの無い寡黙な人物である点を指摘し、市長職に不適任だとスキャンラン氏は異論を唱えるが、物静かで温和な外見のオブライエンは実は優れた知性の持ち主である、とギャフニーは持ち上げ、選挙運動をして明日には30票を確保してみせる、と自信満々。ひとりモーラン夫人は、そんなおとぎ話は信じられない、と憤慨して席を立つ。オブライエン市長を誕生させ、人気を背景にお手盛りで市長俸給を千ポンド増額させれば、我々の債券回収も容易になる、とギャフニーは請け合う。

債権者たちが解散した後、口下手な自分にはとても無理な話だとオブライエンは訴えるが、市議会を巧妙に根回しして過半数の票を獲得する政治力が自分にあり、あんたはただ用意された演説原稿を市議会で暗唱すればよいと、(ケリーに草稿を練らせた)愛国的な原稿——英国国王の訪問を絶対に受け入れない趣旨の原稿——をギャフニー自ら読み上げて披露する。その名演説にいたく感動したモイラは、アイルランドのためにもこれを暗唱するように父親を説得し、ギャフニーの妙案に感謝する。だが、彼は彼女の肩に手を乗せ、「いずれ、感謝の仕方は教えよう」と、不気味な謎めいた言葉投げかけるので、彼女ははっとなる。幕。

第2幕。市長公邸⁴⁾ (Mansion House) 二階の部屋の正面。第1幕冒頭に登場した2人の雑役婦マーフィ夫人とモロウニー夫人が清掃作業中。まさかオブライエンが市長になるとは、という驚きや、市長公邸清掃業務をケリーに斡旋してもらった感謝、オブライエン夫人がかつて帽子屋のしがない女店員だったゴシップ、騒然たる議会で「静粛に」を繰り返すだけが市長の任務なのよ、といった雑談を交わす。

(いまや市長夫人となった)オブライエン夫人が登場。マーフィ夫人は帽子屋の話をおとぎと持ち出し、彼女の成り上がりを当て擦って退場。モイラも登場し、父親が見事な演説を市役所 (City Hall) でやってのけたと興奮して伝える。ギャフニーがモイラに気があり、結婚を望んでいることを夫人は仄めかすが、彼女はむしろケリー青年に好感を抱いている。市長就任以来、母親につきまとうバターフィールド少佐 (Honourable Major Butterfield) と名乗る不審な英国人の姿を、いままた公邸の一階で見かけたことをモイラが伝えると、彼はアイルランド総督副官 (aide-de-camp to the Lord Lieutenant) の好人物だと夫人は答える。

召使が名刺を運び、35歳で洗練された物腰の、このバターフィールド少佐が夫人との面会に現れる。彼が提案するのは、もし英国王訪問を市長が歓迎するなら、准男爵 (Baronet) の称号が必ず市長に授与されること、そうならば2年程度⁵⁾の〈市長夫人〉ではなく、永続的な〈准男爵夫人〉の身分が保証されること、そのためにも親英的姿勢に転換するように市長の心を動かしてほしい、という要請であった。

群衆の歡呼のなか、疲労気味のオブライエン新市長がギャフニーに支えられるようにして登場。さらなる愛国的スピーチを求める群衆の要望に応じるべく、市長は窓辺に立つ。ケリーは演説文句を即興で考えて市長にプロンプトし、市長はそれを鸚鵡返しに繰り返す。だが、ケリーがうっかりモイラとの会話に夢中になった隙に、市長は暗記していた昼食会用スピーチを間違えて喋り始め、ギャフニーは慌ててケリーに口述を続けさせる。真の執筆者がケリーであると判明した、例の愛国的なスピーチについて、モイラがあれこれ尋ねると、彼は意外な告白——自分が心底から憎んでいるのはイングランドではなく、薄給でこき使うギャフニーであり、スピーチ原稿で「イングランド」とあるのはもともとは「ギャフニー」、「アイルランド」とあるのは「ケリー」であり、彼への個人的な恨みをこめたからこそ、熱烈な文面に仕上がったこと、幸せそうな振りをするのがアイルランド人の哀しい^{きが}性で、自分には金も友人も恋人もいないが、ただひとり関心を寄せる女性はあなただけ——をモイラに告白する。モイラは、ある英国人少佐が母親を籠絡して英国王歓迎を画策しており、これを阻止する支援をケリーに要請、彼は承諾する。

戻ってきたギャフニーはモイラに、市長の実権を握る黒幕は自分であり、父親を市長選に担ぎ出すことを思いついたのは、彼女を一目見たときに〈この女と結婚すれば幸福になれる〉と直感したからだ、と暴露して結婚を迫る。そこへ、掃除道具を手にしたマーフィ夫人が現れ、当惑するギャフニーの隙を見てモイラは逃げ出す。怒ったギャフニーがマーフィ夫人を罵ると、逆に夫人は彼に詰め寄り、駆けつけたモロウニー夫人も騒ぎ立てるので、ギャフニーは退散する。

第3幕。市長執務室。書類の署名作業を終えた市長は、秘書役のケリーから本日の行動予定を聞く。午後4時から小学校での賞品贈呈と挨拶に備えて、一夜漬けて丸暗記したスピーチを練習するが、'basis' (土台) を 'basin' (洗面台) と度々言い間違えて、ケリーから訂正される。その後も、明日予定の晩餐会スピーチと混同し、いっそのこと自分の言葉で簡単に挨拶したい、と申し出る市長に、新聞社が期待するのは常套的な演説だけ、とケリーは取り合わない。

続いて、1幕の債権者3人組(スキャンラン氏、ドハティ氏、モーラン夫人)が、公衆浴場兼洗濯所(wash-houses)新規建設の陳情に訪れており、処分したい老朽賃貸住宅をダブリン市当局に高値で売却して暴利を得ようというのが彼らの魂胆である旨を市長に伝える。3人は執務室に通され、市長就任の祝辞を美辞麗句を並べてスキャンラン氏が述べ、浴場建設の陳情を切り出す。すかさず市長は、浴場建設は地域住民の強い要望なのか、また、そのために撤去される賃貸住宅の所有者は誰なのか、と問い詰める。所有者が他ならぬこの3人であることを確認した市長は、庶民の血税を投じての買取りを断固として拒絶する。市長で収まっていられるのも自分たちのお陰であり、反抗的態度で臨むなら、また以前のように、ズボンの尻に継ぎはぎをした貧乏金物屋に逆戻りだ、とスキャンラン氏は、オブライエンをなじる。騒ぎを聞きつけたオブライエン夫人は警察を呼ぶようにケリーに命じ、市長とケリーは他の公務と称して退場、3人の陳情団も憤懣をもらしながら退室。

続いてバターフィールド少佐が登場し、持参した賄賂の宝石箱をオブライエン夫人に贈る。市長が

戻り、ケリーが間違えて手渡したらしい訂正前の原稿——まだ、「アイルランド」「イングランド」が「ケリー」「ギャフニー」のままのもの——を暗記しようと朗読して、意味不明で途方に暮れる。少佐は市長に、くもし公約を違えて英国王を迎えたところでなんの損失もない、市長任期が切れればただの人だが、准男爵の称号を得ておけば、高給取りの保険会社理事にも天下れる、後ろ盾のギャフニーの意向が気になりなら自分が彼と直談判する」と、方針変更を迫る。しかし、オブライエンには別の大きな個人的な懸念——もし公約に違背すれば、愛国的な一人娘モイラが自分のもとを離れるだろう懸念——があった。

夫人に呼ばれて登場したギャフニーは、これまでの主義主張をあっさりと覆して、英国王を歓迎する決心を固めたと平然と語り、公約破りでもメディア操作で世論の反発は押さえられる、と切り捨てたあげくに、破産の淵から救い出し、市長の椅子まで与えてやった見返りとして、娘モイラとの結婚を認めてくれ、と言い出す始末。ちょうどやってきたモイラにオブライエンは、ギャフニーとの結婚意思の有無を確認すると、死んだほうがまし、と彼女は一蹴し、すでにケリーからの求婚に応じたことを示唆する。爵位に目が眩んで英国王を歓迎するなら二度と父さんとは口をきかない、というモイラの言葉にわが意を得た彼は、訪問反対の姿勢を堅持することを宣言し、ギャフニーを市長公邸から追放する。雑役婦たちが登場。マーフィ夫人は市長に演説を所望し、市長は、今後はケリーに頼らずに自分なりのスピーチを行うこと、派閥や英国当局に牛耳られることなく、人々の権利のために戦う、市民のための市長になるつもりだ、と高らかに宣言する。幕。

(III) 主題について

(1) 英国国王のアイルランド訪問問題

マクナルティの『市長』と同じ頃に刊行された、ジョイス (James Joyce, 1882-1941) の『ダブリンの人々』 (*Dubliners*, 1914) 所収の短編「委員会室の鳶の日」は、1902年10月6日のパーネル1周忌に当たる日に設定され、翌年にイギリス王エドワード7世 (Edward VII. 1841-1910, 在位1901-10) のアイルランド訪問を控えている時期を扱っている。エドワード7世没後、王位を継承したのはジョージ5世 (George V, 1865-1936; 在位1910-36) で、イギリス王のアイルランド公式訪問は1911年4月、このジョージ5世の戴冠巡幸以後、現在に至るまで1世紀近くも途絶えているという。ちょうどわが国の天皇が戦後60年近くたったいまでも、韓国や中国を訪問する政治的環境が整わないのと同様である。1914年初演のこの『市長』における英国王訪問問題が、1911年の情勢をモデルとしているのか、あるいはその後の再訪問を視野に入れた虚構なのかは、明確でない。

少し長い引用になるが、英国王のアイルランド訪問を拒絶する議会発言の原稿本文を見てみよう。

「私ははじめてこの議会で起立して、心の中に燃え上がる言葉を申し上げます。さきほどまで傾聴したいくつかの演説は、アイルランドの人々の人生への恥辱であります。事大主義の人々やイギリスかぶれの人々 (shoneens⁶⁾) によって生み出された、追従主義の末裔であります。英国君主はアイルランド人奴隷から忠誠の誓いを受けるべく、この偉大な市を訪問予定です。彼は私からは、いかなる忠誠も受けることはないでしょう。私はイギリス系アイルランド人ではありません。私は生粋のアイルランド人であり、本日この場に起立して、国民の精神、アイルランド独立の精神を唱道します。本日ここに起立して、わが民族の代々の宿敵に向かって、服従拒否の姿勢を浴びせます。本日ここに起立して、アイルランドの人々を擁護し、わが故国の束縛なき独立を唱道します。私は、事大主義の者でもなければ、同胞の神聖な感情を売り飛ばす商人でもありません。ほかの観光客と同様の形で英国国王がこの地に来るのはかまいませんし、歓迎もいたしますが、私は彼に膝を屈してお辞儀はしません。私は、祖先がその英雄的な生涯を捧げた、アイルランドの自由という聖なる大義の裏切り者にはなりません。私にとってアイルランドの緑の旗は自由の形象です。私は決してこの旗を裏切る者にはなりません。私はその旗の聖なる襞のもとに生き、死んでいきます。そしていまわの際まで言い続けるであろうように、いまも神に向かって言ひましよう、『英国との結合を打破し、神がアイルランドを救われんことを』と。」(20)

1914年初演の時点では政治的にかなり過激に響いたに相違ないこの演説が功を奏してオブライエンが市長に選出される設定は、アイルランドの人々の心が、ジョイスの言うようには、まだ麻痺しきっていなかったことを暗示する。しかし、この名演説を物したのが、アイルランドの政治的独立を心底からは信じていなかったケリーであり、またこの原稿を舞台上で読み上げる役回りが、単に政略として傀儡市長を誕生させようと思論んだギャフニーであったことは、著者マクナルティの皮肉な意図が隠されているようである。

(2)ダブリン政界の腐敗・汚職

利権に群がる市議会議員たち、その議員に就職斡旋などの便宜供与をねだる有権者たち——こうした政治的腐敗の構図は国境や時代を越えて遍在していることがわかる。

「議会に入ってあなたは一体なにを期待していたんですか？ ゼネコンとのコネもあるわけじゃないでしょうに？」(9)というギャフニーの言葉は、公共事業をめぐる

政治家と建設業界との癒着を物語る。「議会に入るまでは自分に親戚が何人いるのか、まったく分からなかったが、入ってからは、わがスキャンロン一族の家系図は実際、果てしなかったね。しかも、どの分家の者も仕事の口をほしがったもんだ」(11)というスキャンロン議員の台詞は、一般有権者側のモラルの低さも政治腐敗の一因であることを示している。

しかも、この当時のダブリン市議会議員は、無給の名誉職に近いものだったようで、スキャンロンに言わせれば、「人が議会入りをめざすのはなんのためだと思ってるんだ？ 道楽だって？ 家へ帰って寝てやがれ！ わしらを議会に送り込んでおきながら、時間の損失に金を払ってくれないのなら、わしら自身でどうにかして払うしかないじゃないか」「只働きする奴なんかいないさ。国会議員は報酬を得ている。なぜ、市議会議員はだめなんだ？」「人々は只でわしらに仕事をさせておきながら、汚職となると高潔ぶって憤る始末だ」(12)、などといった傲慢な居直りが妙な説得力を持って聞こえたりする。それはちょうど、「私には決断力がないにしても、とにかく良心はある」と訴えるオブライエンを、「だったら、あなたは公的生活には不向きですな」(47)と切り捨てるギャフニーの辛辣さに、納得させられる観客・読者が多いのと同様である。名誉や良心といった美德を政治家に望むのは論外だと、劇作家マクナルティは考えているようである。

(3)庶民の健全な倫理観

しかし一方では、庶民代表の形で登場する二人の雑役婦(とくにマーフィ夫人)、あるいは元・金物商ジミー・オブライエンや娘モイラのように、健全な倫理観を持つ、まっとうな人々が描かれているのも見落としてはならない。マーフィ夫人の台詞——「市長公邸のお掃除ですよ。ちかごろ、ちょっとばかし汚くなりましたんでね」(24)や、「汚い土足の靴跡を床掃除するように、とのお言いつけでして。おまけに、この市長公邸には、土足より汚いものがありますよ」(36)には、政治腐敗に対する辛辣な風刺が込められている。若いモイラは、「市の行政のありかたに関心を持つことは、市に役立ちたいと望むすべての市民の義務です」と訴え、「父は気高い義務感から議会入りしました。他の議員さん方ほど口数は多くないかも知れませんが、立派な仕事をたくさん黙々とやった、って父は言っています」(10)と、父親を擁護する。オブライエン議員の、娘による業績評価の可否はさておき、傀儡市長から市民派市長への脱皮を促したのが、娘モイラの父親への全幅の信頼と愛国心であったことは、苦い風刺に満ちたこの戯曲にあって、明るい要素である。腐敗を嫌悪し、権力に媚びない、若い世代の良識や健全な判断力が、植民地支配下のアイルランド政治を動かす力となりえることを

示唆するからである。

(4)屈折したナショナリズム

このモイラを愛する若者ケリーの内面は、もう少し複雑である。彼は、没落を嘆くモイラの母親を慰める際、「黒雲に銀白の裏付け」(〈憂いの反面に喜びもある〉という意味の諺)を、間違えて「銀白の雲に黒の裏付け」(7)と反対に表現してしまう粗忽者であり、かつ「親切と助言、それだけが取り柄」(7)と自認する善良な気性からすれば、雄弁なお調子者の「ステージ・アイリッシュマン」の系譜に位置づけられる登場人物である。毎分70語の速記能力があるモイラに、自分も速記めいたことはできるが、速記なのかオガム文字なのか区別がつかない、と答え、〈オガム文字というのは、岩盤にハンマーとノミで刻んだ、古代アイルランドの速記文字で、1か月に10語の悠長なスピードだった〉(8)と、ユーモラスな解説を提供する場面や、ゴースト・ライターとして市長の演説草稿を巧みに口授したり、書き上げる手腕などはその典型である。

しかし、彼の陽気で屈託なさげな外見の裏側には、深い苦悩や葛藤が秘められ、それがアイルランド人であることに対する、絶望的な屈折したナショナリズム意識に根差していることを以下の台詞は示している。

「そりゃ、そのう、もちろん僕はアイルランド人です。でもそれで、なんの得があったんですか？ アイルランド人だというのでこれからどんないいことがあるんですか？」(31)

「イングランドは僕になんどの危害も与えなかった。イングランドは僕に汗水流させなかった。イングランドは飢え死にしない程度の薄給で僕を雇ったりしなかった。ギャフニーはした。イングランドは、僕の人生にまとりつき悪夢のように僕の魂を締め上げたりはしなかった。ギャフニーはした。給料も上がらないのに、国を愛してなんの役に立つって言うんですか？」(32)

連合王国に取り込まれ、実質上の植民地支配下にあったアイルランド情勢を考えるとき、とかく〈イングランド対アイルランド〉の二項対立図式でとらえがちであるが、ケリーの告発は、アイルランド社会の支配構造における内なる敵、搾取する支配者階級に向けられていることは注目すべきである。もちろん、アイルランド社会の腐敗と麻痺の究極の根源はイングランドの圧制・統治にあり、その構図を見抜けずに経済的不如意ばかり嘆くケリーもまた、物質主義に毒されているのだ、と批判することは容

易である。しかし、仮に英国支配がなくなったとしても、同様の権力構造に置き替わるだけであり、階級闘争こそが根本的に必要であることを、ケリーの台詞は端無くも明らかにしている。

②ジョン・コウルター『鼓手隊登場』

(I) 劇作家略伝

ジョン・コウルター (John Coulter, 1888-1980) は1888年2月12日、プロテスタントの両親のもと、ベルファースト生まれ。アート&テクノロジー・スクール (現在のUUB=アルスター大学ベルファースト校) に学び、英国マンチェスター大学奨学金研究生を経て、ベルファーストやコルレイン、ダブリンで1919年まで教鞭を持つ。1920年にロンドンに出て24年に『アルスター・レビュー』(*The Ulster Review*) の編集者になり、27年にはロマン主義月刊誌『ニュー・アデルフィ』(*The New Adelphi*) をマリー (John Middleton Murry, 1889-1957) とともに編集。1936年、カナダ詩人プリムローズ (Olive Clare Primrose) とトロントで結婚。2人の娘 (Primrose, Clare) をもうけ、1980年12月1日トロントで死去 (92歳)。

コウルターの処女戯曲『コヌア』(*Conchobar*, 1917) はアルスター・サイクルに基づく作品。『静かな谷間の家』(*The House in the Quiet Glen*, 1925) は縁談にまつわる喜劇で、その続編『家族の肖像』(*The Family Portrait*, 1937) は前作上演に対する劇作家の家族の敵対的な反応や物質主義を風刺的に描いたもので、移住先のトロントで初演された。『聖なるマンハッタン』(*Holy Manhattan*, 1941) では、アルスター移民がニューヨークのビルの屋上に故郷の家のレプリカを拵えて故国をしのぶが、最後にはアイルランドを後にしたことを受け入れる話で、のちに小説化されて『マンハッタンの泥炭の煙』(*Turf Smoke in Manhattan*, 1949) になった。ウィラン (Healey Willan) によって潤色されたオペラ・リブレット『悲しみのデアドラ』(*Deidre of the Sorrows*, 1944; のちに『デアドラ』 [*Deidre*, 1966] と改版) では、処女作以来、再びアイルランド神話を題材に取り上げている。本稿で扱う『鼓手隊登場』(*The Drums Are Out*, 1948) は、①のマクナルティの『市長』がそうであったように、この劇作家が還暦を迎えたときの作品で、アルスターの警官の娘がIRAの青年と結婚することで生じる軋轢を描いた話である。植民以降のアイルランド近代史——1640年代の内戦からペイズリー (Ian Paisley, 1926-) の時代まで——を2部構成のラジオ劇で描いた『神様はアルスター人』(*God's Ulsterman*, 1974) もある。

カナダ移住後の主要作品は<リエル3部作> ('Riel Trilogy', 1949-75) で、「メティス」(Metis) と呼ばれる、カナダのフランス人とインディアンの混血族の指導者リエ

ル (Louis Riel, 1844-85) の史実を描いている。リエルは1869年と1885年に、メティス族に加えられた虐待に抗議するべく、現在のマニトバ州 (Manitoba) で蜂起を指導した。このリエルとアイルランドの独立革命指導者たち、あるいは19世紀のマニトバと現在のケベックやベルファーストの間に、ある種の主題や象徴の類似性が見いだされるとされる。このほか、詩集1冊(1946)、詩劇『おやすみ、可愛い子』(*Sleep, My Pretty One*, 1961)、悲劇俳優エドモンド・キーン (Edmund Kean, 1789-1833) の研究書『帽子いっぱいペニー硬貨』(*A Capful of Pennies*, 1967)、フランス領ケベックのドラマ・ドキュメンタリー『フランソワ・ビゴット』(*François Bigot*, 1978)、『チャーチル』(*Churchill*, 1945)、演劇回想記『わが時代に』(*In My Day*, 1980) などがある。

(II) 戯曲の梗概

『鼓手隊登場』は1948年7月12日、いみじくもボインの戦いの記念日にアビー劇場で幕を明け、ロング・ランをおさめた。当初1週間の予定だったが、5週を過ぎても満席状態が続き、まだまだ続演可能と思われたが、8月から自作『幸運な指』(*The Lucky Finger*) の上演と交替することをアビー劇場の大御所演出家レノックス・ロビンソン (Lennox Robinson, 1886-1958) が望み、別の機会での再演を約束して打ち切られたが、結局、この約束は反古にされ、コウルターは憤慨している。

場面設定は1920年代初期⁷⁾の「紛争」時期の西ベルファースト。新旧両教徒の居住区域の中間地点にあるトマス・シェリダン巡査部長 (Sergeant Thomas Sheridan) の自宅居間。

第1幕。50歳すぎのシェリダン巡査部長は鏡に向かって髭剃りの最中。夫人 (Mrs Sheridan) と一人娘ジーン (Jean) はソファーに座って、買い出しの計画中。街の治安は日増しに悪化して農作物が市場に出回らなくなる恐れがあるため、日常食料品の買いだめに迫られている。病気療養中の身であるにも関わらず、シェリダンが苦勞して髭を剃っているのはこの日が彼の警察入隊記念日であり、かつちょうど1年後のこの日には依願退職を申し出て、念願だった田舎での悠々自適の隠遁生活を、年金を頼りに始める心積もりでいるからである。退職前に巡査頭⁸⁾ (Head Constable) に昇進する可能性を妻から訊かれたシェリダンは、先日、多くの署員の面前で「模範的行動」で表彰され、大いに赤面する思いだったと打ち明ける。安静にと、言い残して出かけた夫人は、玄関先で若いニクソン巡査 (Constable Nixon) の来訪を受け、部屋に案内した後、買い物に出かける。ニクソンに冷淡な対応を見せるジーンに、近ごろ、だれに対しても娘は不機嫌だ、とシェリダンは詫言を入れ、二階へ去る。

ニクソン巡査は、巡査部長代理が所有するモーター・バイクを借りるから、近郊のドライブに出かけないかと、ジーンをデートに誘う。これまで幾度となくしつこく誘惑されてきたジーンがやはりきっぱりと拒絶すると、ニクソン巡査は今朝の新聞の切抜き記事を取り出して彼女に渡す。シェリダンの部下の若いコノリー巡査 (Constable Connolly) が射殺され、その犯人としてデニス・パターソン (Denis Patterson) というIRAの男が指名手配され、情報提供者に100ポンドの懸賞金があることを伝える、顔写真入りの記事だった。デニスとは無関係と取り繕うジーンだが、ニクソン巡査は、二人が恋仲である事実を知っていると告げる。デニスはトリニティ大学の医学生、ジーンは教職課程の学生、そしてニクソンはフェニックス・パークの警官養成所訓練生として、この3人はかつて同じ時期にダブリンに居合わせ、デニスの勧めでジーンはゲイリック・リーグやシン・フェイン党に参加、ともに共和国思想に染まっていく様子を彼は観察していたのだった。北アイルランド警察の父親の娘が共和国支持者である不合理をニクソンが批判すると、他人に強要しない限り、思想の自由や権利を認めると父親は保証した、とジーンは反論する。ニクソンは、一目惚れしたジーンに恋人がいて、もはや叶わぬ夢と思っていたが、配属先のベルファーストでジーンとの再会を果たし、しかもその恋人がIRA逃走犯という千載一遇の好機が到来したこと、しかも二人が今年の休暇に、夫婦と偽ってバンドーラン (Bundoran) の町に婚前旅行をした秘密を知っていると告げ、警官の父親の名誉を汚したくないなら自分を選ぶようにと恐喝し、立ち去る。

打ちひしがれ涙ぐむジーンのもとへ、近所に住む鳩好きの男マット・マッキャン (Matt McCann) が顔を見せ、シェリダンの病状を案じるが、階上で安静中、と聞いてすぐに立ち去る。通りから古物回収業者の呼び声——「(ご不要の) 古着、傘骨、ジャム瓶、酒瓶はございませんか?」——が近づいてきて、ノックの後、男が部屋に入ってくる。断るジーンに彼はドアを締め、彼女に迫ってくる。ジーンの抵抗に変装をといた男は、実はデニスその人だった。例の新聞記事を示してコノリー巡査射殺犯なのか、と問いただすジーンに、関与はしたが直接の銃撃実行犯ではない、とデニスは弁明。ジーンはニクソン巡査からバンドーラン宿泊旅行の件を仄めかされたことを伝える。ニクソンの推測と異なり、実は二人はすでに婚姻を終えて正式な夫婦となっており——教師の職と収入、実家での生活を維持するため結婚を内密にしていた——しかも、妊娠の兆候があり、昨日の検診で懐妊が確認された、とジーンは告白する。(当初、この醜聞に激怒していた医師も、街を離れた静かな土地での静養を勧めてくれたという。) しかしデニスは、今夜、「ブラック・アンド・タンズ」や警察をおびき寄せる陽動作戦の指揮を執る指令を受けていること、不測の事態に備え、シェリダンを勤務につかせないこと、消灯や戸締まりをして警戒することを命じて、再び通りへ戻り、回収業者の呼び声を繰り返す。

やがてシェリダンが階下に降りてきて、制服や靴の手入れをしながら、頑張れば出世すると諭されたが、巡査部長が関の山だったか、とやや自嘲気味に語る。皆から人望と尊敬を集め、自己と職務に忠実だった父さんの人生は成功と呼ぶに値する、とジーンはとりなすが、シェリダンは「人殺し」の

IRAに肩入れするジーンを嘆き、彼女はIRAを政治原則のために闘う「愛国者」だと擁護する。窓から差し込む陽光に美しく輝く娘の姿にみとれたシェリダンは、お互いの主義主張は違っても親子の情愛になんの違いもない、と昔のような抱擁を求め、キスは返すが悩みごとを打ち明けられないジーンの頑な様子に落胆する。彼は、健康を回復した以上、職務専念義務があるとして今夜から夜勤に出かけると言い出し、ジーンは必死に思いとどまらせるように説得する。

マット・マッキャンが再び訪ねてくる。街中で不穏な動きがあること、日頃はおとなしいプロテスタントの人々が政治に翻弄されて、カトリックのパン屋を襲撃して金を強奪したこと、政治に動かされない犬や鳩の方が人間よりもまだ賢明だ、と彼は話して、(手品師のように)上着の胸ポケットに潜ませていた見事な鳩——シェリダンは盗品だと疑う——を取り出して見せる。動物には暴動の勃発を予知する能力があり、実際、コノリー巡査が射殺された日は鳩が動揺する不審行動を見せたが、今朝もまた様子がおかしい、と洩らし、青い宙返り鳩(tumbler)の曲芸を見物に我が家に寄らないか、と誘う。ちょうど降りてきて聞きつけたジーンは、父を外出させないように釘を刺す。そこで、マットはチェッカーの勝負にシェリダンを誘う。(このとき通りでは回収業者を装うデニスの呼び声が聞こえ、これ以降、ジーンの緊張は緩むことがない。)やがて、マットが駒を隠すズルをしたらしく、二人は口論となり、マットは盤をわざとひっくり返す。

そこへ買い物帰りのシェリダン夫人がニクソン巡査と一緒に入ってきて、家の中でも外でも喧嘩ばかりと、嘆く。市内ではすでに投石が始まり、嵐の前兆となるプロテスタントの鼓手隊が通りに登場したらしい演奏が聞こえてくる。デニスがこの地区に暗躍しているというニクソンの情報に、シェリダンはベルトを締めて出勤しようとするが、夫人がすでに署に連絡して彼には自宅待機の指示が出されていることを知って激怒する。ニクソンは本署に戻り、相変わらず聞こえるデニスの呼び声に不安を募らせるジーンは、「コノリー巡査の報復だ」と不吉な予言をするマットに向かって唐突にヒステリックな叫び声を挙げ、一同は啞然となる。鼓手隊の激しいドラムの音は耳を聳さんばかりの最高潮を迎え、幕。

第2幕。同日の夕方。夜間の騒動に備えて、シェリダンは裏庭で板に釘を打ったり鋸で切ったりする音が聞こえるなか、シェリダン夫人とジーンの話が続く。ダブリンに出かけてからすっかり共和国側の主義主張にかぶれてしまったと母親は嘆き、娘の夫デニスが警官殺しまで犯したことをなじると、ジーンは思わず、彼は犯人ではないと口を滑らし、今朝デニスにこの家の中で会ったこと、彼の子どもを妊娠していることを打ち明ける。驚きながらも夫人は事態を受け入れ、娘のために最善を尽くすと約束する。ニクソンが二人の関係を嗅ぎつけているいま、ニクソンより先に自分の口から婚姻と妊娠の事実を父に告白せねば、とジーンは焦っている。

そこへマットが登場。カトリックのパン屋リンチ事件の報復に、今度はプロテスタントの郵便配達人が暴行されたニュースを知らせる。マットによれば、25年のキャリアを持つ馴染みの配達人であるにも関わらず、カトリック住民は郵便物を溝に投げ捨て、殴る蹴るの暴行を加えた挙句、ある主婦は

ヤカンから煮え湯を彼に浴びせ、駆けつけたカトリック神父は、「善良なカトリックの皆さんの振舞いとしてはよくありませんよ」と悠長に宣ったのだという。誇張された作り話や「汚れたカト公」という差別語にジーンが抗議すると、カトリックに肩入れする彼女をマットは批判し、裏庭で作業中のシェリダンの様子を見に退出する。新旧両派の対立の溝は深く、決して埋めることはできないと悲観的な母親に、反目や殺戮の無意味さを必死になって訴えるジーン。

そのとき、暴動が迫る騒音が聞こえ、夫人に呼ばれたシェリダンは投石よけの雨戸(shutter)をマットとともに居間に運び入れ、窓のブラインドとカーテンの間に挟んで立てかける。やがて暴徒の投石が始まり、近所の窓ガラスが割れる音。マットは自宅に戻るべきか躊躇するが、留守中に鳩小屋(loft)を「カト公」に壊されるのは御免だ、と帰って行く。玄関の戸締まりの確認に行っていたシェリダンは、夫人の呼び声に促されて戻ってくる。彼は玄関先で、<この家に押し入って、コノリーと同じ目にあわせてやれ>と扇動する声とそれを押しとどめる声[声の主がデニスであることは3幕で明かされる]を聞いたことを伝える。やがて1発の銃声を機に、警官の警笛、暴徒の投石と窓ガラスの破損音、マシンガンの応酬掃射、暴徒の悲鳴や怒号、装甲車の音がして、ようやく静寂が訪れ、安堵の声をもらす夫人。

このとき、裏口で不審なノックが響く。デニスだと悟ったジーンは父親の制止を振り切って戸外へ出るが、腕力がないので両親に助けを求める。シェリダン夫妻に両肩を支えられ、重傷を負ったデニスが入ってくる。ジーンは救急車を呼ばないように父親に懇願し、一時失神していたデニスも負傷の事情——ふくらはぎに銃弾を受けて大量失血したため、応急的にシャツを止血帯代わりに使っている——を説明する。かつてトリニティ大学医学部4年生だったとうっかりジーンが口を滑らしたために、シェリダンはこの男がIRA 指名手配人デニスであると確信し、銃を向けて職務質問する。しかし、デニスが逮捕に応じず、また所持している銃の提出を拒否するので、警笛を鳴らして戸外の巡査に知らせようとする。ジーンは狂乱状態になって地団太を踏み、もし警笛を鳴らしてデニスを連行させるなら、自分は家出して父親とは絶縁、いざとなれば自殺もやりかねない、と訴え、彼の子を宿している事実を打ち明ける。シェリダンは苦しい決断のすえ、明朝までの滞在猶予を認める。

戸外からパトロールの警官2人組の足音が聞こえ、投石被害の有無を尋ねる声に、シェリダンは何ごともない旨の返事を返し、彼らは立ち去る。嘘をつき、もはや弁解無用の窮地に立たされたことを後悔しながらも、デニスの怪我を治療するべく、救急用品を持ってくるようにシェリダンは命じる。去って行く警官のかすかな口笛の音が深夜の街に響く。

第3幕。午前3時。治療を受けソファで眠るデニスに付き添うジーン。激痛にうなされて目を覚ましたデニスに、いまのところ不審な動きはないと安心させる。もし玄関先が塞がってれば、IRAのブレナン司令官(Commandant Brennan)が救出に駆けつけた場合に時間を浪費するから障害物を除けるようにデニスはジーンに依頼し、その間に銃に弾丸を装填する。軍と警察の装甲車の音が付近に迫るが、やがて去って行く。一睡も出来ぬまま二階から降りてきた夫人とジーンは、歩行が出来

ないデニスはいざばらくの間、ジーンの部屋に匿うのが賢明と判断し、夫人は二階へ戻る。デニスは我が身の不遇を歯ざしりする。(第1場)

朝食の時間。ガラス破片はジーンによってきれいに掃除され、雨戸も取り外されている。自室からジーンが出てきて、降りてきた夫人と言葉を交わす。シェリダンも二階から降りてくる気配に、ジーンは急いで自室に引き返す。デニスがまだこの家の中にいることを夫人から示唆されたシェリダンは、これから本署に出頭して、警官としての職務に違反して犯人を匿ったことを自供する意思を告げる。夫人は、せめて今回だけは目をつぶってほしい、高潔な使命感と引き換えに、娘夫婦の幸せのみならず、年金頼みの自分たち夫婦の穏やかな余生まで台無しにしてしまう、と反論し、一步も引かない。

そこへまた、マットが登場し、指名手配犯デニスが逮捕された、という誤報を伝える。逮捕されたにしては、警察の動きが今朝は慌ただしいと当人も訝しみながらも、顔や手を真っ黒にして石炭売りに変装したデニスが、警察本部に石炭を売りに行き、大胆にも署内の娯楽室で警察高官相手にデニスの噂話までしたのだという。鳩を見に来るように勧めて、マットは退場。

続いてニクソン巡査が来訪。取り逃がしたデニスは近隣地区の民家に匿われているに相違なく、一軒のこらず家宅搜索し、見つからなければ連帯責任として全戸の家具調度を戸外に搬出させ焼却する強硬措置をとる、と声明する。シェリダンはこれから本署に出頭すると告げるが、報告の中身についてはニクソンに言質を与えない。娘が犯人を匿っていた事実を自分は知らなかった、と報告しなければ、懲戒解雇処分を受けて年金も支給されないし、再就職も不利だとニクソンは進言し、一切を正直に自供することはしないように夫人にも促すが、夫人は諦めの言葉を返す。

ニクソンが退出するや、戸外で装甲車の停車音と乱闘の音がする。やってきたのは「ブラック・アンド・タンズ」軍人と警官に変装したIRAメンバー3人で、シェリダンから銃と警笛を取り上げ、ジーンの部屋からデニスを連れ出す。同行を求めるジーンの依頼を拒絶し、彼らは再び装甲車に乗って去って行く。玄関先で彼らに殴り倒されたニクソンが戻る。シェリダンは、勾留の可能性もあるので帰宅時刻は分からない、と告げ、ひとり自首に向かう。夫人とジーンは衝撃を受けてその後ろ姿を見送り、困惑して互いの顔を見交わすのみ。幕。(第2場)

(III) 作品の主題

前述のように、著者コウルターはプロテスタント作家であり、紛争による国家の分断が個人の人生に障害を引き起こす悲劇を、プロテスタントの視点から描くことがこの作品の主要なテーマである。宗派(プロテスタントとカトリック)や政治的立場(ユニオニズムとリパブリカニズム)の相違がもとで、愛し合う男女が社会的に認知されず、ロミオとジュリエットのように苦悩する構成をもつ演劇作品を列挙すると、以下のようなになる。

著 者	戯 曲	初演	男性主人公	女性主人公
St John Ervine	<i>Mixed Marriage</i>	1911	プロテスタント	カトリック
Brendan Behan	<i>The Hostage</i>	1958	プロテスタント	カトリック
Wilson John Haire	<i>Bloom of the Diamond Stone</i>	1973	プロテスタント	カトリック
Graham Reid	<i>Remembrance</i>	1984	プロテスタント	カトリック
Christina Reid	<i>Did You Hear the One About the Irishman ...?</i>	1985	プロテスタント	カトリック
John Coulter	<i>The Drums Are Out</i>	1948	プロテスタント	プロテスタント

上の表から分かるように、アーヴィンの『混信婚』を嚆矢に、混信婚や混信恋愛などで社会的に疎外される男女を扱う演劇作品は、〈プロテスタントを男性、カトリックを女性〉の主要登場人物として設定することが定番となっている。しかしながら、この戯曲『鼓手隊登場』のカップルは——IRAのデニス・パターソンさえもが⁹⁾——プロテスタントである点が異色であると言えよう。デニスもジーンも北アイルランド出身で、ダブリンに上京して勉強するうちに「アイルランド化」、つまり心情的に「共和派」に傾倒してしまった経緯がテキストで語られる。『鼓手隊登場』は、宗派は共通しながら政治信条の点で、属する共同体と齟齬をきたし、孤立する男女を描いている。この〈IRAシンパのプロテスタント夫妻〉という設定は珍しい設定である点を強調しておきたい。カトリックへの共感があっても、プロテスタント劇作家のオケイシー(Sean O'Casey, 1880-1964)やショーが、IRAや共和主義にこれほど肯定的に関与したプロテスタント登場人物を描くことはなかった。たとえば、1920年代初めの、『鼓手隊登場』とほぼ同時期のダブリンを扱うオケイシーの『ジュノーと孔雀』(*Juno and the Paycock*, 1924)でのIRAは、復活祭蜂起で片腕を失ったジョニーの背信行為を許さず、拉致して死の粛正を加える冷酷非情な組織という印象を与える。もちろん、デニスやショーが密告などの裏切りを犯さず、仲間からきちんと救出される展開のせいもあるが、オケイシーが醸し出すIRAに対する嫌悪感や暗い影は『鼓手隊登場』には感じられない。プロテスタントのIRAという設定自体、オケイシーにはおよそ想定しがたい形容矛盾の存在だったかもしれない。

この作品が、「教条的な立場はまったくとらないが、北(アイルランド)の残虐に関していかなる解決策も提示していない。希望がもし、暗示されているとすれば、昔ながらの敵意を若者が最後には拒絶するだろう可能性にある」(William J. Feeney, p. 289)という論評は、文学(演劇)は現実(政治)に対して無力であるという、聞き飽きた論評の焼き直しであり、〈IRAシンパのプロテスタント夫妻〉という特殊な設定を矮小化している。むしろ、この「劇の弱点は馴染みのありすぎるプロットと登場人物の発展の深みの欠如であるけれども、二つの敵対する党派を結びつけようとする試み

は、ダブリンの諸紙で非常に好意的な劇評を得た」¹⁰⁾という現実の方を筆者は重く受けとめたい。

(IV) 初稿と改稿の異同とその効果について

II章で詳述した梗概は、実は改訂版のテキストに基づくものである。初稿と改訂版の相違が顕著に見られるのは第3幕である。すでにみたように、改訂版では、重傷を負い、自力逃走が不可能なデニスは、翌朝になってもジーンの部屋に匿われてシェリダン家にとどまり、ニクソン巡査の来訪直後に偽装英軍(正体はIRA)によって救出される。

しかし初稿段階では、まず先に、偽装英軍による救出作戦が秘密裡に遂行され、シェリダン家にデニスの身柄がなくなったのちに、ニクソン巡査が来訪する流れになっている。つまり、初稿では、シェリダン巡査部長の犯した服務違反は前夜の犯人隠秘の罪にとどまるのに対して、改稿では犯人隠秘の時間が長くなり、しかもIRAの襲撃で部下ニクソンも負傷したうえに、逃走犯の身柄を目前で奪われる大失態を招いている。つまり、改稿によって、シェリダン巡査部長の罪状は情状酌量の余地がますます少なくなっている。言い換えれば、比較的軽微な罪状であるにも関わらず苦悩する初稿の方が、より自己に厳しく、良心に忠実で、実直な信念の持ち主としてシェリダンを造型することになる。また、家族の対応に関しても、自首出頭するシェリダンを必死にとどめようとした挙げ句に、衝撃の余り呆然と立ち尽くすほかない夫人と娘を描く改稿に対して、初稿では夫人が夫の自首の意思を尊重し、やさしく抱擁を交わしているし、ジーンも頭をあげて毅然とした台詞を最後に発している。つまり、より高い倫理規範を自らに課すシェリダンに妻や娘が一定の理解や評価を示している初稿に対して、改稿では自首を受け入れられず、ひたすら混乱する惨めな二人が描かれている。

この点に関して、コウルター自身は次のように改訂の意図を説明している。——「改訂は主として、救出場面を(第3)幕の最初から最後に移したことから成る。改訂理由は、初稿では、救出ののちに緊張感が消失し、尻すぼみの効果を持つがゆえである。このため、巡査部長のジレンマ——警官としての職務を果たすべきか、家族や自分の幸せへの情愛や配慮から職務を免れるべきか——に関する興味を薄れさせていた。移し変えによって、芝居の最後まで緊張感が維持されたのである。」⁽⁵⁾

劇作術の観点から言えば、終盤に急転直下の救出作戦の山場を設定し、妻子の制止を振り切って出頭するシェリダンと、あとに呆然と残される二人を描く改稿版は、劇作家の言うように緊張感が持続され、圧倒的にセンチメンタルな情感を喚起するだろう。しかしながら、初稿の方が、すでにデニスが救出されて展開上の緊迫感は薄れる

としても、デニス不在の舞台上、警官たる自己の使命の違背に誠実に苦悩するシェリダンの内面的葛藤に、より焦点が絞られるのみならず、その判断を是認する家族の強い信念や絆も浮かび上がってくる。隠匿した殺人犯をみすみす取り逃がし〈自首はやむなし〉と思われる客観的状況にあって、なお未練がましく哀願する家族を描くより、〈なにも、自首までしなくても〉という状況で、あえて自首を選ぶ悲壮な父親の後ろ姿を家族が毅然として見守る方が、観客に深い感銘を与えるように筆者には思われる。

注

- 1) Gaffneyの連想としては、'gaff'に「いんちき・いかさま」,「かつぐ・だます・ごまかす」, 'gaffe'に(社交・外交上の)「失敗・失策・失態・へま」の意味がある。弁才のない男を雄弁家に仕立てあげる「いんちき」を行い、最後にその悪巧みが「失敗」に終わったギャフニーに、いかにも相応しい命名である。
 - 2) ケリーが遅刻の理由として挙げる「ストライキ参加者による市内電車路線の損傷」(5)が真実か口実かはさておき、こうした理由を挙げるほどのストが行われていた時期と考えられる。具体的には、1913年8月26日朝、「市電会社の七百人の従業員が一斉に、運行していた市電をそのままにして立ち去った」ダブリン・ストライキが起きている。[P.B. エリス (堀越^{とも} 智・岩見寿子 訳)『アイルランド史 下 民族と階級』(論創社, 1991年), p.46.]
 - 3) 1840年に制定され、翌年に施行された〈市議会改革法〉(the Municipal Corporations Reform Act)によって、宗旨に関わらず年10ポンドの納税者は誰でもダブリン市長に立候補する権利を得ていた。ちなみに、1840年以前は市長になるには複雑で階層的な過程を経ねばならなかった。当時の市議会(City Assembly)の構成は、市長以下、24 Aldermen, 2 Sheriffs, 48 Sheriff's Peers, 96 Common-councilmenの171名であった。市長をめざす者は、まずダブリンのtrade guildを代表する平民参事(common-councilman)に選出され(これは3年ごとの選挙)て市議会に入り、数年勤めた後にSheriff of Dublinとして1年勤める。これで自動的にSheriff's Peerの一員に加えられ、Aldermanとなる資格を得て、その後市長に選出される機会をうかがうことになる。(出典 <http://www.dublincity.ie/dublin/mayorfrm.htm>)
 - 4) 市長公舎であるマンション・ハウスは1715年4月25日に市議会が3,500ポンドと、毎年40シリングと6ポンドの砂糖を支払う条件で購入した。(出典は同上)
 - 5) 歴代のダブリン市長名簿によれば、1841年の初代市長ダニエル・オCONNELL (Daniel O'Connell, 1775-1847) 就任以後、——1924年から30年、69年から74年の間は市議会は閉鎖(suspended)——2004年6月21日就任の現在の375代マイケル・コナハン (Michael Conaghan) まで、ほとんどの市長が1年間だけ着任している。多選で長期間市長に在職したのは、1930年から39年まで連続9選してまる10年勤めたアルフレッド・バーン (Senator Alfred Byrne), 7選で1917年から24年まで勤めたロレンス・オニール (Lawrence O'Neill) が突出している以外は、3選者が3人、再選者が15人で、ほとんどが1期1年で退いている。なお、現在のアイルランド首相アハーン (Bertie Ahern, 1951-) も1986-87年にダブリン市長職を経験している。
- さて、マクナルティの戯曲『市長』に関わりを持つ、20世紀初めの市長は以下の通り(出典は同上)。1914年の時点では、ローカン・シャーロック市長が現職にあるが、作品との関係は明らかでない。

1900-01	Pile, Sir Thomas Devereaux (Baronet)
1901-04	Harrington, Timothy Charles [1902,1903再選]
1904-06	Hutchinson, Joseph [1905再選]
1906-08	Nannetti, Joseph Patrick [1907再選]
1908-09	O'Reilly, Gerald
1909-10	Coffey, William
1910-11	Doyle, Michael
1911-12	Farrel, John J.
1912-15	Sherlock, Lorcan G. [1913,1914再選]
1915-17	Gallagher, James Michael [1916再選]

- 6) shoneen: *n.* (*pejor.*), a person more interested in English language and customs than Irish ones; a 'West Briton'; a pretentious person affecting airs and graces, with a preference for things English; an upstart; a hanger-on < Ir *Seon* (variant of *Sean*), John (as a typical English name: cf. John Bull) + dimin. suffix *-in*. — Terence Patrick Dolan, *A Dictionary of Hiberno-English* (Dublin: Gill & Macmillan, 1998), p.239.
- 7) シェリダグン巡査部長の所属は「現RUC (北アイルランド警察), 旧RIC (アイルランド警察)」とテキスト冒頭に明記されている。RICは1922年4月4日をもって公式に解散したが、英国下院では解散に伴う職員の年金関連法案を5月に通過させ、実際に解散が完了したのは8月とされる。同じ5月にベルファースト議会が「1922年警察法案」を通し、6月1日にRUCが発足した。[Chris Ryder, *The RUC 1922-1997: A Force Under Fire* (London: Mandarin, 1997), pp.47-48.] これらから判断すると、この作品の時代設定は、厳密には1922年6月以降と想定される。
- 8) 「巡査長」や「巡査頭」と直訳できるが、日本の警察階級では「巡査」(職名は係員)と「巡査部長」(職名は主任)の中間に属する階級が「巡査長」(職名は指導係員)と呼ばれており、これと混同を招く恐れがあるため、妙な訳語だが「巡査頭」を採用した。なお、「巡査長」は規則上制定されていない(つまり、正式の階級ではない)が、運用上、階級と同等の扱いをしている警察本部が多数あるという。出典：<http://kfn.ksp.or.jp/~gauche/SFX/Kuuga/kaikyuu.html> [access date:03/10/15] なお、*The Belfast Book 1929: Local Government in the City and County Borough of Belfast* (Belfast: R. Carswell and Son, 1929), p.158.によれば、1929年10月1日時点で、ベルファースト市警察職員の構成は以下の通りで、巡査部長は7人に1人、巡査頭 (Head Constable) に至っては約40人に1人という狭き門であった。

職 位	人数	比較
Inspector General	1	0.1%
Deputy Inspector General (Commissioner)	1	0.1%
County Inspectors	3	0.2%
District Inspectors	12	1.0%
Head Constables	33	2.6%
Sergeants	169	13.3%
Constables	1,044	82.7%
Total	1,263	100.0%

- 9) デニスの宗旨についての判断は明確でない。筆者は当初、IRAメンバーであるからカトリックと速断し、またGeraldine Anthonyの研究論文でもデニスを「カトリックのIRA指導者」(The Catholic IRA leader)と言及している。[W.H.New (ed.), *DLB Vol.68: Canadian Writers, 1920-1959 First Series*,

(Detroit: Gale Research Company, 1988), p.83] しかしながら、コウルター自身が序文の中で、登場人物のほとんどは現実に自分が見たことのあるモデルがいて、それは「ともに〈アイルランド化〉した、ダブリンで教育を受けたアルスターの教師やアルスター出身のトリニティ大学学生(the Ulster student from Ulster)」(p.3) だと指摘し、「遅すぎたかどうか分からないが、私はダブリンに行く決意を固めた。国民的忠誠心と共感の気持ちから、私もまた、私の劇のなかのデニスやジーンと同様に、〈アイルランド化〉してしまっていたのだ」(p.6 波線は引用者)と述懐していることを考えれば、ジーンもデニスもアルスターで生れ、ダブリンに上京したことが強く示唆される。言い換えれば、デニスがもともとダブリン在住の根っからのIRA メンバーであったならば、この一節は極めて不自然な解説になってしまう。また、「ようやく1970年になって、カトリックがTCDに入学することを禁じる命令('ban')をカトリック聖職者が撤回した」(582) とする記述から判断すると、1920年代においてトリニティの医学生デニスがかトリックである可能性は低く、プロテスタント小説家グレン・パターソン (Glenn Patterson, 1961-)、ノルマン系の〈民族名〉デニス——劇作家デニス・ジョンストン([William] Denis Johnston, 1901-84) もプロテスタント——などの連想から、プロテスタントを暗示する名前であることを考慮すると、筆者はデニスをカトリックと断定することは躊躇され、むしろプロテスタントだと推測する。

- 10) W.H.New (ed.), *DLB Vol.68: Canadian Writers, 1920-1959 First Series*, (Detroit: Gale Research Company, 1988), p.117.

テキスト (英文テキストからの邦訳引用は以下の版を使用し、引用末尾に頁数を付した)

Edward McNulty, *The Lord Mayor: A Dublin Comedy in Three Acts* (Dublin: Maunsel and Co., 1917)

John Coulter, *The Drums Are Out: A Play in Three Acts* (Chicago: De Paul University, 1971)

参考文献

John Coulter, *Riel* (Toronto: The Ryerson, Press, 1962)

Prelude to a Marriage: Letters & Diaries of John Coulter & Olive Clare Primrose (n.d. [Canada]: Oberon Press, 1979)

Eugene Benson and L.W.Conolly (eds.), *The Oxford Companion to Canadian Theatre* (Toronto/Oxford/ New York: Oxford University Press, 1989), pp.116-8.